

勇敢なる母

粕屋郡久山町 加世田 勲

当時（昭和16～19年）、父の仕事の関係で家族は樺太（サハリン）に住んでいた。冬は家の軒まで積雪があるので、玄関から道路までは各家々で雪道を確保しなければならないほど、冬の作業は大変であった。しかし、石炭・森林・海産物などの資源に恵まれて、島民共々満ち足りた暮らしをしていた。その頃の思い出といえば、各家々では安いニシンを買い込み、その腹からは数の子を取り、ニシン自体は身欠きニシンとして天日で乾燥して冬の食料に備えた。今では高価な数の子も各家々にはリンゴ箱一杯にたくわえられ、子供のおやつにするほどであった。

さて、太平洋戦争も日々激しさを増す昭和19年には、家族6人そろって、日本本土に引き揚げることになった。途中、宗谷海峡では本船の前方を行く貨物船に敵潜水艦が放った魚雷が命中して大きな火柱と共に、船首を上げながら船尾から沈んでいくのを見た。また大阪駅では敵機が投下したと思われる毒ガス騒動に巻き込まれた。やっとの思いで九州にたどりついた家族は、そのまま田舎に疎開することになった。これは、その疎開地での話である。

それは昭和20年、梅の実が黄色に熟れ始めた頃であった。小生と姉は母の手伝いということで、梅の実をとりに行った。まず小生が梅の木の出るだけ高いところまで登り、全身をつかって付近の枝をゆするのである。すると梅の実は音を立てて地上に落ちる。それを木の下で待つ姉が拾い集めて竹籠に入れる。ある程度の実を落とせば小生の役割は終わったことになるので、姉の作業が終わるまでは木の上で梅の実をかじっていた。硬くてすっぱい梅の実は奥歯にこたえたが、腹ペこの小生にはこのうえないご馳走だった。

空腹が満たされると心にゆとりができるもので、梅の小枝をすかして見える風景に見とれていると、プロペラ機の爆音と共に近づく機影が目に入った。それはあたかも遊覧飛行をするかのように、ゆっくりと上空を旋回していたので、小生は片手で小枝をかき分けながら、その飛行機に向かって手を振った。その時である。遠くで母の呼ぶ声がした。

「二人とも何をしている！ 梅の実はいいから、こちらへ来なさい！」

小生は、何のことやらわからないままに、梅の木から飛び下りて姉に聞いた。

「どうしたんかのう ……………」

「さあー ねえー ……………」

二人の会話が終わらぬうちに、血相を変えた母の姿が見えた。その姿を見て小生は一瞬とまどってしまった。何と、髪を振り乱し、裸足のままで厚い布団をひきずるようにして走ってくるのである。そして母は再び叫んだ。

「二人とも、あの杉の下まで走りなさい！ 急いで！」

「……………」

小生と姉は、母の無気味なしぐさに、ただ逃げるように走るしかなかった。二人は無気味な母に追われるように懸命に走った。小生は生れてこのかた、絶対の信頼を寄せてきた母に、これほどまでに不信感を募らせたことはなかった。

「何をしている もっと走って！」

「……………」

「走らないと死ぬ！ 急いで！」

疾走また疾走、小生の息が途切れそうになった時、母の声も途切れた。杉の木までは、まだかなりの距離を残して畑の中を疾走中、母は何を思ったのか突然二人を後ろから突き倒した。

「あっ！ いてえ」

小生は姉と共に畑土の中に沈んだ。次の瞬間、二人の上には母の体があった。さらに二人は母の両腕で押さえられ、肥臭い土からの脱出はもちろんのこと、身動きすらできなかった。その上、母が持ってきた蒲団で三人は覆われていたのである。蒸し暑い梅雨の時期、不安と共に

小生は生きた気持ちはしなかった。間もなく、三人の頭上を飛行機が大きな爆音を残して通り過ぎていった。それからしばらくして、母はそっと立ち上がると、二人にこう言った。その時の顔はさきほどとは打って変わって、いつもの優しい母の顔だった。

「さあ もういいよ おうちに帰りましょう」

小生は何が起こったのか、知るすべもなく母と姉について帰路についた。布団をかつぐ母の後ろ姿に、小生は間もなく子供ながらに万感胸に迫るものを感じたのである。

それは、敗戦間近い日々のこと。米空母から発進した艦載機は、我が国の迎撃機による抵抗もなく、我がもの顔に日本本土に飛来していた。小生が梅の木から見た機影は、敵機のグラマンだったのである。危険を知った母は、即座に布団をかつぎ小生と姉を助けるために、獲物を物色しながら旋回する敵機の下を走り抜けてきたのである。母は綿でできた布団は機銃掃射の銃弾をくいとめることができると思ったのであろう。畑の中で布団をかぶせて小生を守ってくれたのである。幸いにして銃弾は当たらなかったが、近くの木々に弾痕が残っているのを小生の目で確かめることができた。小生はいまだかつてこのような勇敢な人を見たことはない。それが我が母だったとは…………… 女は弱し、されど母は強しと言うが、あの日のことを思う度に、敵機の下を走り来る母の愛に頭が下がる思いである。世の母は皆勇者である。